

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌) 第三五二号
昭和四十六年七月二十日印刷 昭和四十六年八月一日発行



第三十七卷

第八号

1971

8



目 次

表紙「鳴戸の渦」松涛達文画

平和に還える唯一つの道標…………… 鶴 飼 隆 玄………… (2)

特集 社会福祉と仏教

保護司の立場から…………… 鈴 木 在 定………… (4)

丹 羽 演 誠………… (7)

特別養護老人ホームを訪ねて…………… 萱 垣 光 英………… (10)

中 村 信 夫………… (12)

浦 崎 芳 夫………… (14)

昭和法然上人伝 三味発得・明遍と親鸞…………… (16)

浄土歳時記《はづきの巻》…………… 若 林 隆 光………… (18)

カンボジアの旅(下)…………… 佐 藤 治 子………… (20)

孝子善之丞物語…………… 吉 田 光 覚………… (24)

懺悔文…………… 加 藤 達 也………… (26)

「道」日岡への道…………… 高 橋 良 和………… (28)

浄土宗の古刹をたずねて…………… 宇 高 良 哲………… (32)



語和声念

(秋の七草)

はぎ、おばな、くず、おみなえし、ふじばかま、なでしこ、あさがお——秋の七草の訪れる頃となった。春・夏・秋・冬、四季それぞれの花々が目を楽しませてくれる。

決して広いとはいえないわが棲屋の裏庭の垣根に、これまた決して大輪とはいえないぬささやかな朝顔が、それでも、毎朝、五輪六輪と遠慮深げに開いてくれる。背の低い五郎兵衛燈籠の陰に、はぎが一叢、出番を待っている。ところが、このごろの都会生活では、夏はクーラー、冬はヒーターと季節の変化を疎外し、一年中を平均化してしまっている。いわば季節的ノッペラボーである。

屋内をいつも一定の温度に保って、卓上には色あせることのないホンコンフラワーを飾り、冷蔵庫には一年中トマト、キウリ、キャベツ、レタスを蓄え、テレビでは倦きることなく野球とプロレスを見る。これでよく人生を退屈しないものだと思心させられる。

しかも、かくのごとくなりといえども、

花は愛惜に散り、草は棄嫌に生うるのみなり（正法眼蔵・第三）

道元禪師の隻語が思い出される。

平均化されざるわが家の庭は、天然自然の理に随って、とほしいながら、四季それぞれの花々が訪れる。そして、その花々はおのれのつとめが終え、次の花が舞台の袖に出を待つと知ると、静かに、音もなしに散り去ってゆく。もう一日、いや半日でいい、咲いていて貰いたいと念じて、花々は淡々とみづからのだめに応じて去る。文字どおり「愛惜に散る」のである。

こうした感懐の反面、今日はこれをして、あれを片づけ、明日はどこそこへ行つてなにをしようという雑念が、ふと心の隅にきざしてくると、それはたちまちに黒雲のように心の全面にひろがり、花を惜しむ心をまたくまにおおいかくしてしまふのである。——今日もまた三十度を越す暑さになるだろう。どこか涼しい山にでも逃げ出したいものだ。そんな欲念が頭をもたげる。まさに「草は棄嫌に生うるのみなり」である。

（竹中）



平和に還える唯一の道標

鵜飼隆玄

(総本山知恩院執事長)

七月十五日は盂蘭盆会として日本でも千年以上の歴史がありますが、明治維新後の改暦で新旧両用の暦となった為に地域の八月十五日に行なわれるお盆が多くなったのであります。

七〇年代の変革が常識的理解とされて文字通りの無常迅速で変化が続発しています今日、反体制的な変革目標を感情的に否定することはありませんが、激しい変移には応じ切れぬ多数の人々は拳惜を失い、唯徒らに利己的防衛に腐心して、他を顧りみない馬車馬的行動をくり返して、対立と混乱の渦中に沈んで朝に源氏を迎え、夕に平家を送る主体性のない生活が現代の実態であると思うのであります。

主体性を欠き断絶、人間喪失といわれる様に、共同社会の

一員としての連帯観すら失った私達の実体を凝視する時、果たしてこれによいのかと反問せずにはいられないと思います。然し断絶現象は昭和の異変ではなく、人類に年齢、教養、経済力等の相異のある限り、いつの時代にも断絶があった事は歴史が証明していますが、断絶が人間喪失に連鎖反応した事は稀れではなかったかと思えます。

一面断絶現象の存在は人類進歩の過程に於ける必然的事象ではあったが、それを埋めて尚温かい人間関係を保ち得たのは、人々の生きた信仰心の賜であったといえるのです。

このような見解で歴史を播いて今日とを比較する時、如何に人間に信仰の必要なるかは、誰しも認めることができます。思います。

憶えば今日程人間性を無視した唯物的思考に支配された時代は、過去になかったと考えます。

信仰の否定、無宗教が現代人の誇りであるが如き誤りが実存しても、国民感情として未だ伝統のお盆行事が活きているので、その機会に自から欠けるものを貰ね、それを補って、再び人間性豊かな幸せを蘇えらすべきだと思います。幸い仏縁深い行事は、信仰の有無に関係なく各地で各種の行事として行なわれ、抵抗なく関与する機会に恵まれていますので、その一行事を起点として人間性復活への道として、信仰心の発芽ができるのではないかと思います。

成る程、科学の進歩が自然征服の力ありとする錯覚を基盤とした論理と推理が、自然と人間の本質的関連をも誤らしめていたのではないかと考えられます。

随って本能的な欲求として、唯物的計算に基づく基本人權思想と、その乱用が人間性の問題や生活体系の狂いを招いている事は自明であるが、敢えていえば、これは人間の幸せの道ではない事が余りにも明瞭であります。

世界的に経済大国と認められた日本では、科学が発達して一年中、菊花が店頭に咲き食膳に胡瓜が供せられていても、やはり涼秋の菊花の香りは人の心を執え、真夏の胡瓜には温床胡瓜にないそれらしい味を持っています。

この一事に鑑みても宇宙自然の恵みなくして人間の真の幸せは存在しないと思えます。

法然上人の御言葉の中に、

例え一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして 云々（一枚起請文）

とあります。

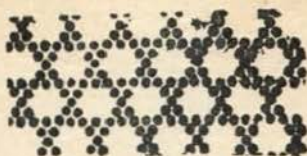
現実に大自然の力に直面している科学する人々が、謙虚にこの言葉を味って頂く時、自から仏智仏力の偉大さと人間力の過小さが理解でき、自力依存から仏力即ち他力への信頼感が湧いてくると信じます。

人智の極限力ともいえる人工衛生が月に着陸しても火星に飛ぼうが、悠久の自然は千古不変ではありませんか。

人智、科学による豊かさには恐るべき公害を伴い、自然征服の前に人類自滅の穴が掘られているではありませんか。

人間は自然の恵みと力を無視した空も緑もない文化生活では、幸せは発見できません。

一枚起請文の御言葉を噛みしめれば、他力の導き、生かされる喜びに合掌念仏する心が開けるものと信じます。他力のお念仏こそ対立、混乱、断絶のない生活に還る唯一つの道標になると信じます。



=保護司の立場から=

東京深川心行寺住職

鈴木 在 定

これは十年前のある一つの想出である。
いろいろの関係で親しくしているひとから相談というか、
あるいは依頼というか、とにかくそういう話もちこまれた
のである。

そのひとと私の寺とは距離的にそれほど遠くない。夫婦の
間には現在高校一年に在学しているKがあつて実はそのKの
話であつた。

Kは一人っ子で父も母も眼の中に入れても痛くないほどに
幼少の頃から溺愛されていた。がどうしたことが近頃この一
年の間に盗みをやるようになったのである。

一人っ子によくあるようにKは無口であつた。ひととはあ
まり喋らない。陰鬱とか内向型とかいった性格の持主であつ
た。

いままでもたびたび盗みをやって警察に補導された。が、
そのたびごとに、父か母が出頭して戒しめられ注意されて帰
されるのである。あまり度々やるので警察から家庭裁判所へ
送られたこともある。しかし家裁でも年少ということと改善
更生の見込みありということで審判不開始で帰宅を許された。

が、こんどはオートバイの搔っばらいと無免許運転で警察
につかまり、家裁へ送られて、「ねりかん」の異名で有名な
練馬の少年鑑別所に入れられてしまった。

ここは犯罪をした少年達を家裁の審判を受ける前に身体、
精神、環境、各方面から緻密な科学的検査をして審判の参考
資料を作製するところである。短い期間であるが一定の期

間、同じ位の年令の犯罪少年達を監置しておくので少年達には、「ねりかん」の異名が示すごとく恐れられている施設である。

こんどの調査の段階ではどうも少年院送致ということになるらしい。それで私に家裁へ行つてなんとかこんどだけは少年院に送られずに帰してもらえないか頼んでもらいたいとのことであった。罪の子ながら真情を披瀝して懇願する親の至情に私は「仏心者大慈悲是」ともいうべき親心を感じずにはいられなかった。

私は審判の当日家裁へ行つて先づ調査官に面会を求めた。

調査官はいろいろの資料を見ながら窃盗の習癖のあるこの少年については今回は施設送りが適当と考えるし帰されるのは無理ではないかといっていた。しかしどうしてもということであれば、保護司の私が審判に立ち会つてその旨を裁判官に直接話したらどうかということであった。

審判は非公開である。しかし私は調査官の特別のはからいで保護司という立場で入廷を許されたのである。

裁判官も調査官と同じ趣旨のことを話した。が念のために保護司である私の意見を求めた。

私はすぐ近くにある少年の家と私との関係、少年の家庭環境等を話し、こんどだけは特別寛大な処置で自宅に帰しても

らえないか、これがひいては罪の子でありながら切々としてわが子を思う親の真情にこたえ、やがては更生に導く道ではないかと力説した。

裁判官はひと言づつ私の話にうなづきながら、「それではおかえししましょう。ただしこれには条件がある。自宅には直接帰すわけにはゆかない。保護司であるあなたが三ヶ月間預つて、それで間違いを起さなかったら自宅に帰して在宅での保護観察に切りかえてもよい」とのことであった。私は感激してそのまま審判からKの身柄を引受けて寺へ連れかえり三ヶ月の試験観察に移つたのである。

その翌日からいつもの日課のように午前五時半起床、他の弟子とともに三十分間の仏前勤行、それが終ると境内墓地等の清掃、私も若い弟子二人もKも一緒に竹箒を持って落ち葉一つないように掃き清める。清掃した後の気持ちの良さ、Kも日一日と明るさをとり戻してゆくのが目に見えるようであった。

若い弟子と一緒に経典読誦の練習もした。時にはバットをもってキャッチボールをしたり、寺の幼稚園でピアノをひいたり、また真黒になつて庭の雑草を刈ったり、Kも全く普通の少年と少しも変らない、暗い過去のかげなどはみじんもない善良な少年としか見えなかった。私もその更生ぶりにこれな

らと、なかば安心してひたすら試験観察が終つてKが自宅に帰るのを楽しみにしていた。

ところが試験観察もあと余すところ三日で終るというときであつた。その日は丁度日曜日で寺は午前中から午後にかけて法事がたてこめていた日であつた。法事もひととおり終つた午後四時頃である。突然その日の法事をした施主の家から電話があつた。法事が終つて寺からタクシーで他の客とともに帰つたが、東京駅へついてタクシー代を払おうと思つたらハンドバッグに入れておいた二万円余りの金が紛失してゐた。何か心当りはないかという電話であつた。なおそれにつけ加えて法事中親戚の客がむづかる乳呑児をおぶつて境内を歩いてゐたとき窓ごしに十五、六の少年が客間になにか落ちつかない素振りで見たとのことである。

私はハツとして動悸がとまらなかつた。よく調べてからご返事をするということでその電話は切つた。客の見た人相や、年令、服装からKに間違いないと思つた。

それから三時間ほどして夕食もすんで静かになつた頃Kを呼んで、電話の件のいちぶ始終を話した。Kは終始顔を伏せたまま、だまって私の問いに答えようとしなかつた。

その晩八時半頃からKの姿が見えなくなつた。私はしまつたと思つた。しかしもう遅い。私はKの立ち廻りそうなところ

をくまなく捜しまわつたが、Kの行方は杳としてわからなかつた。

私は宗教的な実践と修行によつてKを魂から洗い浄めようと努力をしたが、その努力も空しいものとなつた。が、私は今でも道を踏み違えた少年達を救うものは、單なる更生とか保護とかという技術的なものでなく、ほんとうに心の底から悔悟せしめる宗教的な力でなければならぬと深く確信してゐる。

その後Kは警察の輔導の網につかまり、少年院へ送られることになつた。今ではいろいろの迂余曲折を経たが、ともかく真面目な社会人としてすっかり更生してゐる。

x x x

戦後、急速に発展したものの一つとして更生保護の事業がある。戦前古くは免内保護事業としてごく一部の人達しかタッチしていなかつたこの仕事は、昭和二十四年犯罪者予防更生法、更生緊急保護法、保護司法のいわゆる保護三法の施行とともに犯罪者処遇の方策が確立され保護司はその重要な一翼をになうようになった。この更生保護事業関係者のうち、宗教関係、特に仏教関係者が多数を占めていることは昭和四十四年仏教タイムス社によつて刊行された「仏教関係保護司名簿」を見ても全国保護司定数五二五〇〇名中、僧侶は六八

三二名で全体の一〇・三%を占めていることからみても、うなづかれる。さらに東京の場合についてみれば全都三十保護区の代表保護司（地区会長）のうち仏教関係者は十保護区に及び、特に私が所属している第五方面では地区代表五名中四名までが僧侶という現状である。このことは保護司のなかでもその指導的役割にある保護司にいかにも仏教関係者が多いかという一例であろう。

更生保護の事業がいかに大切な仕事であるかはいうまでもない。施設から出てきた対象者がそのまま野放しにされた場合を考えるとゾッとするような思いである。対象者更生の方法をいかにすべきか。これには環境の問題もあり、家庭の間



一 水たまり

この四月西化されました、大本山、御法主権尾弁匡台下が十年前、私の前住の寺に巡錫になりました。保育園児の花束をうけ、檀信徒の出迎をうけられた御法主が、書院にて休憩にされた時でした。

題もあり、交友関係の問題もあり、経済関係、職場関係等々多岐多岐にわたって総合的に考えなければならないことであるが、私は対象者の更生には、宗教というものが不可欠の要件ではないかと思う。宗教を度外視してはほんとうの意味での更生はあり得ないのではないか。よごれた魂をほんとうに浄めてくれるものは宗教をおいて外にはない。ほんとうに罪の意識に立って魂の奥底から魂そのものを洗い浄めることが大切である。更生保護の仕事は極めて地味であり又大切なものであるが、対象者を真の意味での更生に導くことは、宗教特に仏教関係者以外には不可能という確い信念に私は立っている。

丹羽 演 誠

（大分県佐賀関正念寺住職）

或、青年僧が、御法主に、現在自分の保育園を発展し、幼稚園並びに養老院までの経営を考えている旨をしきりと申し上げ、その内容、土地の事情などお話になりました。

ご法主は、じっと、この青年僧のお話をおきぎになつていました。聞き終ると。

しづかに、

保育園等社会事業も結構なことかも知れない、又それも仏教の相かも知れないが、ひるがえって、道路のくぼみ、水たまりに、人知れず、土を埋めることも大切なことです。

と、語られました。

この言葉に、青年僧は黙ってしまいました。

この話、いろんな意味に受け取れるのではないのでしょうか。

二 社会福祉とは

社会福祉とは、第二次大戦後、人権とともに、重要視される言葉となりました。幸福な社会を作るため、不幸な人を社会全体で幸福にしてあげること。社会連帯の間に不幸をなくし、幸福へと育てようとする考えです。そこには、人間性として培われる心の集りが意義づけられると思います。

福祉事業は、その結果に於て行われるのです。一人の篤志者が中心となり、それに協力する人々により行われ、やがて、公共団体がそれに援助して行くのが順序となっています。

篤志者は、その人の育った環境により、又人生に於ける或感動によって、心の底にひそむ欲求と淋しさが、起点となり、相隣的情として湧いてゆくのでないでしょうか。それ故に人生の深き喜びを感じるのです。

幸福を願うのは、人間の願ひであり、不幸をなくするのは

人類のつとめです。

仏教の教も幸福を求める教です。釈迦の出家は、生死病死の苦をなくすためであり、四姓のない僧伽は福祉の生活でした。

「成仏国土成就衆生」は、福祉国家への願ひです。又、淨土教で云う。「願共諸衆生、往生安樂國」も、同じ意味ではないのでしょうか。

普通、自利利他、自ら利し、他を利すとは自分が悟り得ると共に、その悟りを他に与える。苦に悩む人、不幸な人に、救いの手をさしのべることです。

従つて、精神的に、宗教的信仰によつてこそ、眞の社会福祉が出来るのでないでしょうか。否、社会福祉が育つて行くのでないでしょうか。

法然上人の淨土教も、父の不慮の死が、念仏信仰になる原因となつてゐるのです。「恨は怨を生む。敵を愛する人となれ」……阿彌陀仏の本願の船に乘せていただいて、合掌して念仏する。これが仏の慈悲であります。

三 善行は轍のあとなし

一九二〇年十月、大分に於ける全国里親大会に記念として出版した、「育ての親」という小冊子に、木下郁知事の序文があります。その中に、

……頼まれれば、どんな子でも淡々として受け入れ、育て、そして淡々としてその子の運命にまかせて、世に送り出している一組の夫婦の篤行があります。二〇人ほどまでは名前を数えられるが、そのほかは、どうしても名前が思い出せないという。罪科を脱しきれないままになってしまった若者、氣持のしこりを残したまま戦死した青年、これらのことが夫妻の胸に強く記録されているらしい。

里親担当の児童相談所のひとりの職員は、「三〇人、四〇人と里子を育ててきた人は、全国でも珍らしいことはない。しかし、この人たちのように、かげ口が全くささやかれていない里親は珍らしい。たいてい、里子をどうこうしているな」とかげ口されるものだが」。

乞われるままに無差別平等に育くむ、その中に報いなきことこそ真実の報として、かくれたままにみずからの願いを実践し続けている……

その愛の対象を拡げゆく道が、いつのまにか、自我を消してゆく精進と結びついている……

古語に「善行無極」とありますが、真実の善行は、善を行ってそのあとかたをも同時にけしていくことがあるといわれます。

たすけを求めている初い命に手をさしのべ、はぐくむとい

うことは、世の現れた大事業にくらべるとき、何か小さく、みおとりのするもののようにみえます。しかし、世の中に満ちている不幸を、みずからすすんで分相しようという願いこそ、まさに人間にとって、もっとも高貴なるものでなければなりません。この高貴にして根源的な願望が、公のめだつ事業としてあらわれるのは、その一部分にすぎず、残った大部分はみえないかくれた事業として、かくれたまま埋もれているものです……」

この一組の夫婦が里親と保護司の事業に一生を捧げた、師僧、丹羽貫誠師です。

四 どちらが幸せか

ここまで綴る時、社会福祉と仏教について椎尾ご法主の言葉が思い出されます。

社会福祉は、心豊かな人によってこそ、育てられる、即、信仰に生きた人でこそ。

そこで、私たちは、一人でも不幸な人の友となってあげるのと、友人となつてあげることが大切でないでしょうか。

謙虚に世話するその心が、自ら正しく仏道に励む求道の方となり、仏に憧れる生活が自ら出来でゆくのでないかと思えます。不幸な人に接してはじめて正しい幸福が教えられるのです。

特別養護老人ホームを訪ねて

この訪問記は大正大学老人福祉研究会の一行がその研究と慰問を兼ねて計画した一コマをつづったものである。若人にうつった老人問題の卒直な意見として今後に参加になればと思う。



「赤石寮」での仕事

萱 垣 光 英

私たち大正大学老人福祉研究会の合宿は、去る三月下旬、長野県下伊那郡かなえ町の特別養護老人ホーム「赤石寮」で、三月二十五日から三月三十一日まで約一週間行なった。この合宿は、我々老人研究会発足以来初めての試みである。

赤石寮での仕事は、未だ経験した事のない、御櫛の取り換えや、日頃手につけない便所掃除など、数多くの仕事が我々を待ち受けていた。女子達は二、三人でグループとなつて、寮母さんにつき、御櫛の取り換えや、一人で食事のとれない

お年寄り達に食べ物を養つてあげたりすることが主な仕事であり、仕事の合間には、日頃地域との接触の少ないお年寄り達の話し相手となり、閉ざされた老人の心の中に明るい手をさしのべてあげるように心がけた。

御櫛の交換について

彼女達の最初の仕事は、御櫛の取り換え作業であつた。何しろ初めての事であるので相当手間どつたが、寮母さんと一緒にやっているとつれて次第に何の気なしに、上手にでき

るようになった。御褥の交換は日に四回、AM八時、PM一時、PM四時、PM七時に行なわれている。使用する老人は全体の約八割近くであるため、相当数の洗濯量である。これは専門の洗濯場があり、そこから毎日自動車で運ぶことになっている。

老人との対談



最初はとまどいがちであったけれどもすぐに気楽に話せるようになり、時には二人が親子のような対話や、笑顔を見せる光景があつて正に一つの小さな家庭が生れたような感じさえ受けた。

朝の老人体操

朝の御褥の交換が終了すると、婦長さんの合図で、

老人体操の音楽が全施設に流れてくる。すると、老人達は、自分の体を動かせるだけ動かし、一生懸命やろうとする。これが、ねたがり老人にとって唯一の老人諸機能を回復させる一種のリハビリテーションであろう。

食事について

食事が自分でとれる老人は約半数位であり、残りの半数の老人達は寮母さんに養ってもらうのが常である。年寄達が彼女達に食べさせてもらっている顔は、生き生きとし、ほがらかで、おいしいごちそうをたべているようであった。

娯楽について

我々は、老人達に音楽を演じることによって、生きがい、を、そして心のやすらぎを与え、気持を若くもたせようと試みた。老人ホームでは毎週一回ずつ行っており、老人には大変喜ばれるものであった。確かに、老人達は大声で歌い、笑つてとても楽しかったように受け取れた。

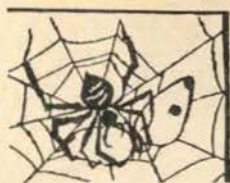
その他

男子は主に雑役を仕事とし、床の掃除、ごみの処理、(便所掃除など)をした。二十七日には約三坪ほどの花畑を完成した。

仕事の内容は我々が想像していたよりも困難であったが、寮母さん達が親切に教えて下さったため、早く手につくこと

ができました。

老人達も、我々が予想していた以上に明るく、ほがらかであり、一般の施設から受ける暗い印象とは対照的でした。また婦長さんを始めとしまして、寮母さん達も大変親切で、老人に対する思いやりが、とても厚く感じられました。



「赤石寮」を訪問して

中 村 信 夫

ごくわずかな実習でしたが、我々にとりまして、とても貴重な経験となりました。

寮長さんを始めとしまして、職員の皆様に感謝の意をこにしるすものです。

のである。

翌日からさっそく各相当のブロックに別れ活動したのであるが、我々を、笑顔で迎えて下さった、おじいさん、おばあさんの顔というものが、人間らしさに素朴である魅力が二重となり、なかなか初対面であった。

人生経験豊かな顔には、歴史の流れの微乱を生き抜いてきた人間の生命というものをまざまざと浮き刻りにされた顔があった。

しかも、平常引っ込み思案の老人でさえもつかの間のさび

三月二十五日、信州の春はまだ浅く、早朝は冷氣さえ感じさせるが、我々大正大学社会事業老人福祉研究サークルは、自信と不安の備る現時点を見つめながら、南信地方下伊那郡かなえ町にそのたくましげな、精神、身体を突つけて行った。その姿勢は、美しく明るく生きる一筋の道を求めているかのようであり、反面青味の帯びた幼なきものも混じり、ざつくばらんの様相を排し、何とも言いようのない雰囲気であった。

さて我々は、色々な希望を抱きながら実習への道を辿った

しさはどこへやら、寮母さんたちも驚くほど一時の夢想到誘われたかのようであったかもしれない。

さっそく、便所掃除・設備の修理・おむつの取りかえから、老人との対話と広域にわたり、それぞれ自己の個性を生かしつつ順応し、態度・情況・現実的実践等を学び、考え、行動する段階をわきまえて、毎日の平常の時間の充実さに努力した。

さてこれから、私が六日間赤石寮で活動した感想を述べてみたい。

人間相互の関係であるが、身体的、精神的に何らかの異常がありながらも、それを除々に克服しようとする涙ぐましい努力をこの目で、この膚で、この身で感じ、胸を打つ場面が多くあった。九十歳を越えるおじいさんが、まっばづえをつきながら浴場まで、汗を流しながら向うから来る姿には、私はただあぜんとしているばかりだった。これには、職員側のアンサー態度が見られず、そのままの状態、時間的な配偶、人間の失損、両方とも言えるのであるが、それにしても、もっと自分をよく見詰め、自分というものの存在を把握する必要がある。老人、いや人間と人間との太いつながり、つまり頼れるところのたよりのある関係をここで強調しておく。

経済面(健康・医療・環境)であるが、トイレ・食事用所・浴場・廊下・室内のニエアンス、人間の日常使用する一番大切な要所である。実に整理整頓され、清潔感があり、一般に普通であるが、男の職員が少く、多くの女性が実務にたずさわっており、男子は事務関係には二、三名ほどおりましたが、実務には見あたりません。だが一人だけいました、幹となる柱が、それが軟弱ではないという時、またその人にとってもゆとりのない毎日を、追われ追われる状態、この点を早急に配慮すべきである。

環境の素晴らしい土地で老人の人間が、のびのび余生を送る。空気は澄み、川は清らかで山々が連なる所、この上ない幸福感を味わうことはない。しかし、物質的、金銭的な面では幸福は本物ではない。生理的な疾患のある老人のためには何とかして快復、維持させようとする医療体制が、人命のかかわる問題として私は考えさせられた。

人権、生きる権利を尊重せねばならない要点から考えると、人間の生のあり方が、しまいに胸の中を循環する。いくら老人だからというような差別的評価は言語同断、結果が目に見えようとも無視することはぜったいあってはならない。よく金がかかるからというが、人間の生命は金には変えられない。医者も人間である。欲望は必ずといっていいほど潜在して

いる。美しく自分の義務・責任・任務を一筋としての道を歩むなら問題はないのだが、つい人間の弱点が他人を度外視し、エゴイズムの象徴たる態度・精神では医師という人間総合的な人格は薄れてしまい、相互関係は徐々に破壊され、最後には、不信が満ちる時点までに至るはめになる。

自分と対象するものと、はっきり心得るべきで、見失う事なく、不屈な精神で頑張っていたきたい。それが現実化されなければ医療問題は解決されない。

私には、「赤石寮」での感想はあまりない。このことは、寮長さんをはじめ、婦長さん、職員の方々の運営方法が充実しているのかもしれない。しかしもっといえることは、そこに



老人福祉を考える

浦崎 芳夫

おられる老人の方々の全員の力で、この老人ホームを守っているからであると私は常に言い続けたい。無欲の顔、花壇造りの際も見守ってくれた老人、それにも増して、涙を流しながら送ってくれた老人、我々は、それぞれなりに吸収し、成長した。

まだまだ改善すべき点は色々あるのは認識している。それも重要であるが私は、批判より一步前進する面で張りきるべきである。

特別養護老人ホームの実体は、まだまだ未完成であるが、この施設は、老人の第二の人生をわかちあう姿があった。もつと我々若い世代の人間も暖かい心で見守ってやりたい。

先日、福島市において全国老人福祉会議が開かれた。この会議には七十歳前後の高齢者が多く出席され、一老人は、「孤独な老人に政府の施策は冷たい。われわれ老人自身が声を大

にしなければ……。」と熱っぽく訴えていたと言う、ある新聞記事も目にした。

昭和三十八年七月、一部対象者の施設収容保護から、全住

民の生活確保ならびに福祉の向上へという、いわゆる社会福祉事業の近代化を指向する、画期的な意義を持ち、世界に唯一といわれる「老人福祉法」が制定された。

この法の第一条「老人の福祉に関する原理を明らかにするとともに、老人に対し、その心身の健康の保持及び生活の安定のために必要な措置を講じ、もって老人の福祉を図る」ことを目的とする基本的理念にたち、施設における保護と在宅保護が行なわれてきた。

近年、養護老人・特別養護老人・軽費老人等各種老人ホームが作られたが、現在収容されている人員は、六十五歳以上人口のわずか一割にすぎない。その一割の収容施設に対しての四十六年度の予算が同年の老人福祉予算の九割以上にものほり、多くの一般老人の在宅保護には一割にもみたない費用で保護が行なわれている。

だが、それで施設の整備運営が十分に行なわれているかと言うと、それも十分に行なわれていない。施設保護において、老人の所得と医療の問題が大きな老人の問題となっていて、完全老齢年金の実施と診療施設の伴った老人収容施設が早急に望まれている。

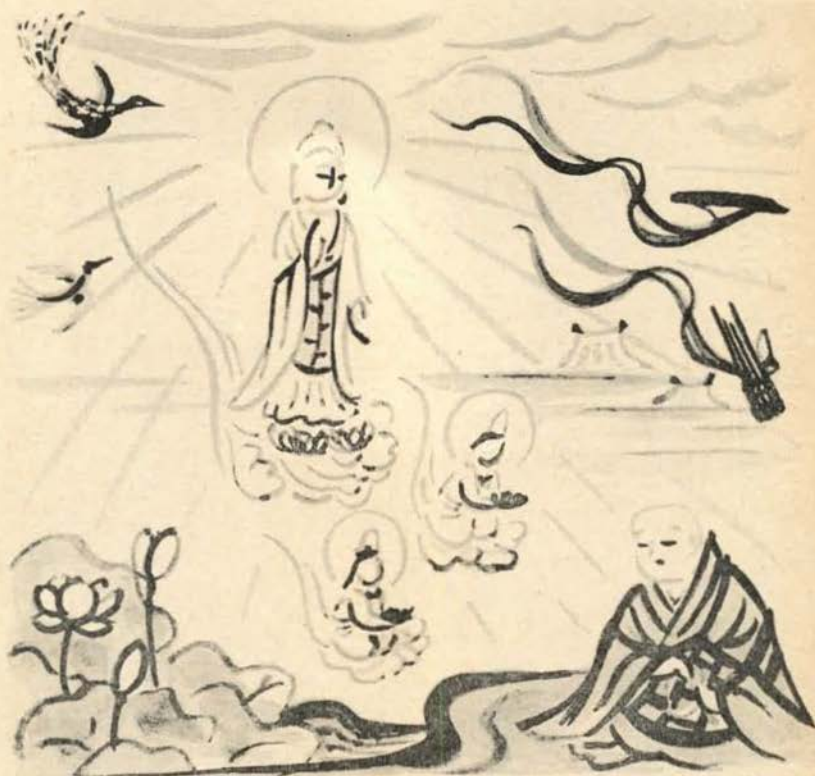
そして、特に在宅老人保護には、現在、健康診査・老人クラブの助成・老人家庭奉仕員（ホーム・ヘルパー）の派遣・

老人福祉センターの建設等が、少ない予算で実施されている。健康診査は全国一斉検診といわれ、その診査が行なわれているが、療養費の問題があつて受診率はあまり高くなっていない。

また、家庭奉仕員は、「ねたきり老人」など「身体上または精神上的障害があつて、日常生活を営むのに支障がある老人の家庭」を訪問して老人の日常生活上の世話を行っているが、地方自治体の経営として制度化されているが、国からの補助金の基準も低く、奉仕員自身の身分や所得保障も不明確のため、制度的に問題を残している。

このように、老人福祉についての、もっとも解決を急がなければならぬ事について多少であるがのべてきたが、今後、老齢年金を主体とした年金制度の完全実施と、最近実施にふみきっている自治体が出ているが、より完全実施なる「老人医療の無料化」が強く望まれる。

しかし、施設や制度がrippにできても、暖かい血がかわなければりっぱとは言えない。最も老人福祉について大事なことは、「人間の暖かい交流がなければならぬ」ということではないだろうか。現代に生きる若い世代の方々にも、将来自分の事として当面すべきこの老人福祉問題について、より深い理解を望んでやまない。



三昧発得 (15)

法然上人は、承安五年（一一七五）に唐の善導大師の『観経疏』を読んで救いの確信をえられ、浄土宗を開かれた。そして、ますます念仏生活の体験を深められた。建久九年（一一九八）ころになると、師と仰いだ善導大師と同じように、しばしば西方極楽浄土の有様を感得するようになった。今までは理論的な理解であったが、念仏のありがたさを体験した上人は、より一層自信を持つようになった。こうした自信がおだやかな上人に『選択集』の選述をさせる結果になり、理論的な表現にも重みを増していった。



明遍と親鸞(16)

このころ高野山に明遍という名僧がいた。彼は『選択集』を読み、疑問を感じていた。ところが、ある夜、天王寺の西門に集まる乞食に匙で粥を与えている上人を夢を見て疑いがはれ、上人に帰依したという。また叡山の堂僧をしていた親鸞は、どうしても自分の悩みを解決することができないので山を下り、吉水の草庵に上人をたずねて教えをきいた。人生に光明をえた親鸞は、たとえ上人に騙をつかれて地獄におちても本望である、というほど上人を尊び、熱心な念仏者となって布教につとめた。

松藩 達文画
玉山 成元絵

浄土歳時記

△はづきの巻▽



若林隆光

(二松学舎大学講師
浅草西光院住職)

もっこくは庭木の王様だというが、ふだんはそれ程の感じもない。しかし夏の盛りになって、枝の先々を薄黄色の花がにぎわすようになると、確かに王者の風格を備えてくる。直径一センチほどの花が開ききって落ちはじめると、あたり一面足をおろすきもないように散りしいたという感じになり、風と共に甘い香りが漂って部屋の中まで流れてくる。手にとってかぐにはあまりに濃艶な香りは、風が運んでくれるのが丁度よい。王者というよりはむしろ女王というべきであろうか。但し風はそよ風に限る。夕方陽が落ちてやっと凌ぎよくなった頃、風のわたりはじめの先頭にのってくるのをかぐと、肌の汗ばんだにおいも、正に風と共に去りぬといった思いがする。さて。

浄土宗のものは他宗のお寺や神社などにお参りするとき、どうしたらよいでしょうか。

夏休みともなればこんな疑問も起り勝ですね。

西行法師が伊勢参宮したときの「何ごとのおわしますかはしらねども、かたじけなさに涙こぼるる」という有名な歌は、実は西行が僧形のため神域に入ることが出来ず、遙かに神宮の奥を拝して詠んだのだという解釈をうかがったことがあります。しかし大峯山でさえ女人に開放される当今では、他宗も、他教もおしなべてお参りする機会は恵まれ過ぎる程でしょうが、そのとき何となくおさまらない気持ちでいるのも偽らぬ心境でしょう。特に浄土宗を目の敵にする日蓮宗系統のお寺の場合、お参りするの何かはばかられるような気がしないでもありません。でもすぐれた美術品があったり、めったに訪れな

い田舎であつたりしたら、横目で見て立寄らないのは、残念至極です。

そんなときには、ためらわず、お参り致しましょう。本尊様が大仏さまであらうと、相手が日蓮聖人のお木像であらうと、はてはマリヤ様であらうと、ナムアミダブツと拝めばよいのです。

そんなことをしてよいのでしょうか。

いいですとも。

阿弥陀さまを拝むとき、ナムアミダブツと拝むのは、あたりまえのことですが、ナムアミダブツという言葉によつて、自分の帰依のまごころを表わすのが、浄土宗のたてまえですから、阿弥陀さまに限らず、すべてのものは、阿弥陀さまのあらわれとして、ナムアミダブツと拝めばよいのです。

自分の耳に聞える程度、というのはわざとらしくない程度で、しつかり手をあわせてナムアミダブツとなえて拝んで下さい。お宮の神様も、十字架上のキリストも、ニコニコとうけて下さるし、まだ助かつていないような類のものでしたら余計ナムアミダブツと称えて、回向してあげるべきです。

— こういう場合、わたくしのはからいを捨てるなどとい

うと何か大層大げさにきこえますが、浄土宗のものは、すべてを阿弥陀さまとおもひなして念仏するか、やがて阿弥陀さまに帰するものとして念仏するか、二つしかないわけです。

よそのお寺やお宮へ行くたびに、オンアボキヤーとか、テンリオウノミコトとか、一ごぎげんとりのようなお参りの仕方をするのは落語家のやること。われわれはすべて、ナムアミダブツとお参りすればよいのです。相手に敬意を表するのは結構なことです。こちらのまことを失つては全く無意味です。もと帝大のお備い外人教師であつたケーベル博士は、同僚の儒者、根本通明の毅然たる態度を見て、一語も交すことがなかったのに、彼は本物であるとして、心からの敬意を捧げたといわれています。

言葉だけが心を表わすのではないことはこの一事からも知られますが、わたくし達が長崎見物に行ったからといって、信じてもないのに、教会で十字を切ったりするのは、お笑い草どころか、キリストもむしろうけがわるいところでしょう。浄土宗の者は浄土宗の仕方、ナムアミダブツと日本中、世界中にお参り致しましょう。ナムアミダブツ。

私達をのせたバスは広い通りを走り出す。あの日本に留学したというガイドさんが、ここまで来て案内してくれること

仏教の国ブノンペン



カンボジアの旅〈下〉

佐藤 治子

は心強い。広場の中央にブノンペン市のシンボルのような塔があって、お釈迦さまがまつられてあった。もうおまいりに来た人もいたのであろうか、お花が供えられていた。

日本大使館へ一寸寄ってもらい、次男の友人に小さいおみやげをおいてくる。丁度、バンコックへ行かれ、留守というので、日本大使館前からトレンサップ河へと向う。メコン河の支流とはいくけれど大きな河。水が満々としている。河岸に床の高い貧らしい家が並んでいる。「ヴェトナムの避難民が住んでいます」という、ガイドさんの表情は、いかにも面白くないという印象をうける。カンボジアの人達には困る問題なのかも知れない。

途中からバスは、もと来た道を引き返し、市中を走る。丘の上にあるブノンという大寺院を参拝。華僑の人達がお寺のわきの小さいお堂へ、お線香やお供物をもっておまいりに来ている。木かげに手相の占いをしている人がいた。エージ

エントの人は手を広げてみせた。この辺では古いがはやって
いるのだろうか。「中々あなたはよろしいよ」といわれ、気
分よくしてそこを立ちさる。

博物館へ入る。あのアンコールトムの王城のテラスにあつ
たという、癩王の本物の像は正面にかざられてあつた。

火 葬 場

博物館の前の通りの向う側に広場がある。真中に四本柱があつて、四方吹きぬけのお堂のような建物がある。そこは王様とこの国の一番えらいお坊さんだけの火葬場だという。公園のような広場に、しかも博物館も近くにある立派な道路の近くに火葬場が。あそこでどうして火葬にするのかしら。丁度一番えらいお坊さんが亡くなったというところで、火葬場も準備をととのえているらしい。お坊さんは白い布で幾重にも御身体をまかれ、百日間そのままにしておくとか。その間、毎日おまつりをするという。そしてこの火葬場で火葬にされるわけである。青芝の広場に朱色を中心にとりどりの色を使い、中々華やかな色彩である。周囲に立派な建物が多し、この中の広場で王様と最長老のお坊様だけに使われる火葬場。やはり仏教国なのだ。バスはお寺の近くを走る。墓地

にかこまれ、小さい火葬場がある。ここは一般の人の火葬場という。

王宮へも行ってみた。許可の取り方の行違いか、中へは入れなかったけれど、王宮の内庭の広い芝生を歩く。朱色を中心に黄色や金色を使った王宮は、真青な芝にはえ、実に美しい。

独立記念塔が見える広場でバスは止まる。ふと朱色の衣のお坊さんが托鉢しているところが見える。店の前に立ちさし出す器に、女の人が膝まづいて何かをその器に入れ、また膝まづいて礼をしている。ちょこちょこ子供が出てきた。驚いたことに、子供も同じように土の上に膝まづき、何かあげている。お坊さん二人はつつ立ったまま。私は驚いてしまった。布施を受けた二人のお坊さんは、そのままスタスタと大通りを横切つて、路地へ入つて行つてしまった。そういえば、バンコックですれちがつたお坊さん達も横柄な態度であつたことを思い出す。三法を敬わなければならない仏教の教えが、南方の仏教国ではかく守られているわけである。

私は偶然町の一隅でみるこができた、布施を受けるお坊さんと布施をさせていた人との敬虔な態度を、じつと見守ることができた。何を上げているか遠くなので分らなかったけれど、子供まで地面にひれ伏して礼拝してからものをさし

出す、あの態度に心打れざるを得ない。

バスは国有の競技場を一巡して、ホテルへと戻る。バスから見た、悠々と水をたたえているトレンサップ河、いずこも真青な緑の大樹と青芝の美しい都。カンボジアの大地をうるおすメコン河に合流する、トレンサップ河の河岸に咲いていた真赤なカンナのアざやかだったこと、いかにも平和そのもののブノンペンでありしと書き、インドから始まったこの旅行の日記帳を閉じる。

サ イ ゴ ン

昼食後、一時ホテルを出発、空港へ。二時五十分出発したヴェトナム機は、僅か三十分でサイゴンへつく。インドへ向うため、上空を通過しているとき、アナウンスを聞いただけで身の引きしまる思いをした、そのヴェトナムのサイゴンの空港に立つ。

軍服のアメリカ兵の多いこと。空港に働く婦人達が、うすくて長いアオザイと呼ばれる服をひらひらさせて、忙しそうにあちへ行ったり、こちへ来たりしている。美しいヴェトナムの婦人服にみとれてしまう。

私達は暫く待って、再び搭乗。パンアメリカン機や軍用機

の一杯の空港を飛び立ち、上空を一回りした時、アナウンスあり。「空港へ戻ります」という。ドキンとした。

再び空港へ戻った私達は、ここでいつ空襲があるやも知れないと、不安の中に三時間待たされてしまった。

ようやく、とつくにホンコンへ着いているはずの夕方も暮れかかった頃、ホンコンへと向け飛びたったのである。もう一泊で日本へ帰れる。約三週間以上の長旅も、いよいよ終ろうとしている。東支那海を北上して三時間もたったろうか、遙か下の前方にチラチラと灯がまばたき出した。ああ、ホンコンにつくのだ。そして、明日は日本へ帰れるのだ。暑い国から、未だ寒さも残っているであろう日本に。

あ と が き

「ブノンペン空港閉鎖」このニュースほど私達を驚かせたものはない。あの平和な寝りたくなるような、しかも美しかった都が、そこから帰って十日しか経っていない。情況おだやかならずなどと、みじんも感じられない所だったのに。

電話のベルが鳴る。「危ないところでしたね」と、思わず誰かに話しかけずにはいられない衝動にかられて、かけてよ

こされた電話であった。本当に、リエムシエンブ空港も閉鎖、あのアンコールワットへも兵隊が入りこんだ。ヴェトナムの避難民殺害。次々と入るニュースに、私の心は暗く、特にあの河畔に住んでいる人達も殺されたのかも知れないと思うと、何ともいやな気持ちにおおわれる。

あの静かなぬたげな空港が？ 私達の泊ったホテルも焼失したというニュースもあった。考えられない。もし、もう少し旅程が遅れて組まれていたら、どこかでカン詰になってしまったかも知れない。もう暫くはカンボジアへは行くことは不可能である。たった十日の違いで、戦争の起ることなど考えてもみられない平和なアンコールワット周辺、そしてプノンペンに行つて来られたのだ。何の心配もなく。

次々と戦争拡大のニュースが新聞に出る。二月二十三日の朝刊に、あのプノンベンの博物館長の必死の願いと努力で、遺跡を保存するための協力を国連にたのみ、一方貴重な仏像等を博物館の地下室へ保管するという、運べぬものは土中に埋めるといふ記事が載っていた。私達が見学した後、十日間の間にワットヤトムへ行つた人達を最後として、再び行くことのできない状態となつてしまつた。

写してきたスライドを通して見るワットヤトム、そして平和なプノンベンの写真などは戦争前の姿となつたわけであ

る。戦火におびえているであろう市民や、アンコールワット周辺の町の人達のことを思うと、心は暗い。一日も早く平和を、と願う心は十日前に現地にいただけに、余計強く願ひ、祈るのである。

今回の旅行記も歩きながら、あるいは走るバスの中にかきとめたノートをホテルで整理し、日記帳に書き入れたものをたよりに、書きつづりましたもので、あくまでも一主婦の私が見たまま、聞いたままのものでございます。時々こまつたことは、ガイドさん達の説明に人の名や場所の名の発音の、はつきり聞きとりにくいことでした。旅行中、ずっとメモをとつていらした丸山さんのと照し合せていただいたりしました。写真を提供して下さつた前田さんにも御礼申しあげようございます。

書いております間、私はあの菩提樹の生い茂る仏蹟を、再び歩いているような気がいたしましたし、思いがけなく行くことができましたアンコールワットとトム、そしてプノンベンの三日間は、思い出新たにするものでございます。つくづくと得がたき旅行であつたと思います。有難いと思います。

(了)

孝子善之丞物語

《第一回》

吉 田 光 覚

(岩手県紫波・極楽寺住職)

福島県の北、伊達の郷に伝わる物語である。文部省が親孝行の代表として、国定教科書に二宮金次郎を取上げる以前は、孝子の白眉としてこの物語が全国に伝わったようだ。それは事実美しい信仰絵巻だったからである。

(一) 氏神の示現

時は正徳六年(二五五年前) 中御門天皇の御代即ち七代將軍家継から名君吉宗に移った頃のことである。旧正月と言えは、わけて宮城との県境であるこの地方は雪も深く寒さも一入きびしい郷である。「半田禿げ山登ればづる／＼」と誰かが揶揄した標高八六三メー

トルの半田山、ここは江戸時代に三大銀山のひとつとして知られていた。この山麓、半田郷の氏神八幡神社の社殿に、毎夜丑の刻(夜半二時)詣りをするみずばらしい少年があった。身にはつぎだらけの薄衣一枚を纏い、モンペに素足で草鞋を穿き、五十分額づいては、「何卒父と弟の病気を治させ玉い、南無八幡大菩薩」と低い声が洩れていた。或夜のこゝと、社前に忽焉と現われた馬乗の人影、「善之丞、／＼」と二声、少年は驚いて頭を挙げた。冠を被り白い直垂に白袴を召し弓矢を手に白馬に乘られた御年三十歳ほどの公家と覺しきお方が見下しておられるではないか。

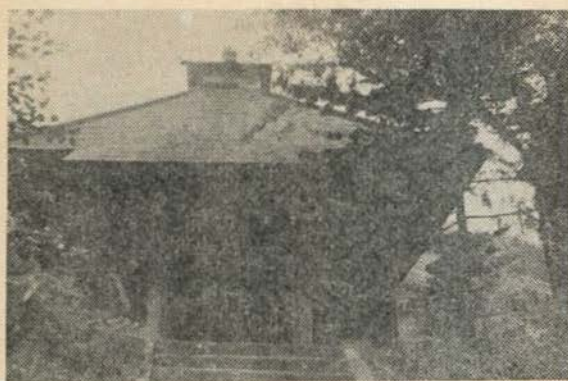
「善之丞、我は八幡大菩薩である。お前は不具の身を以て父の爲に我に祈ること殊勝である。だがお前の父の病は悪業所生の因果なれば快復は容易でない。是から南の薬師如来、その西方の観音菩薩にお願いすれば必ず感応がある。お前は九月十四日の出生だが前世は周防国の山寺に飼われた犬であった。念仏の法音を聞いた菩薩で人間には生れたものの、参詣人を吠え悩ませた罪で吃人に生れたのだ。今、お前のために念仏五百遍を授けよう。これを日課として一生怠らなければ、どうも治癒り来世は救われるであろう」と仰言ったと思うとお姿が消えてしまった。わが家に戻って暫しまどろむ程に「ガタッ」と母の起出した音に目を覺ました善之丞は、むっくりと起上った。

母「まあだ寝ていなよ」善「いいよ、起きるよお母、おれの生れたのは何月何日？」母「何だ、朝からそんなこときいて、何しんだ」善「いや、おら、生れた日位知んねえと馬鹿にされっかん」母「九月十四日の正后(まご)だったよ」善「九月十四日」善之丞は驚いた。昨夜のお告げ通りだ。八幡様のお指図通りに

すればきつと父や弟は救われる」善之丞は心に決めたのだった。

(一) 善之丞の父

今は統合されて桑折町となつてゐるが、当時は南半田村の字田町という小さな部落の百姓だった。名は善四郎、松野の姓を名乗るの



善之丞が最初に祈願した八幡神社

を見ると昔は相当の家柄だったのかも知れない。多少上納もしていたのだから五反百姓の類だったろう。でもこの地方で五反も水田があれば現在でもよい方だ。水田より畑地が多く、養蚕のさかんな地域だ。妻子が身を粉にして働いても、善四郎は性来の怠け者につきものの大酒飲で、家計は傾くばかりであった。師走の日は短かい。いろりを囲んで食事を

了えた妻女は、夫に話しかけた。

妻「明日は伝来寺さ行つてくつかんない」

夫「何だ。何しにお寺さんぞ行くんだ」

妻「報恩講だよ」 夫「何？」

妻「お七夜ちゅうのに」

夫「お七夜だかお八夜だか知んねえが、寺さ

なんか行くことあつか」

妻「檀家はみんなお米と野菜を持ってお詣り

さ行くんだよ」

夫「うち一軒位行かねえたって何でもねえ」

妻「でも、お説教があつから聞いてきたい。

新宅のお安さん（この地方の敬称）が来て、

去年のお説教とってもよかつたから、あし

と一緒に行くべえって、だから約束したも

の」

夫「お説教なんかみんな嘘だよ、地獄だの、

極楽だの、そんなものあるもんか。みんな

坊主の銭とり主義ちゅうもんだ」

妻「そんなこというもんでねえ、罰があたる」

夫「馬鹿。お前ら馬鹿だから瞞されてんだ。

死んでから先なんかどうでもいい。死人よ

り生き仏が大事だよ、それに明日は久右衛

門が頼んでおいた刀を持って来るんだ。年

の暮だし、少しごつとお（御馳走）をして

やっべ」

妻女は諦めざるをえなかった。

翌日の昼すぎに研屋の久右衛門がやつて来

た。久右衛門は不断は割に無口で温かな性格

だったが、酒が廻つたとなると別人のように

変る。小半時も盃を重ねると忽ち二人は口論

となった。余程、何か感情を刺戟されたと思

え「畜生」とどなったとみるや、自分が研い

て来た刀を突差しに振上げて善四郎に切りかか

った。驚いたのは丁度、外から入つて来た妻

と善之丞だ。あわてて二人を取り制えたのだ

った。善之丞十三歳の時である。その時に善

之丞が手にうけた数ヶ所の疵痕が長く残った

という。



懺悔文

加藤達也

(千葉県鴨川町在住)

終戦記念の日を迎えるたびに、満州からソ連生活の四年間を思い出す。

あれから二十有余年。学徒出陣・特甲幹・予備学生と名のみの華やかさの中に、青春のいぶきを殺して生きたあの頃、いま静かに考えれば、後悔の涙にむせぶと言えは言えないでもないが、しかしなんとなく懐しく思いかえされて、わが子に当時の苦しさを話す楽しみも感じられる。

八月十五日(昭和二十年)——わたしが終戦の報を聞いたのは八月十七日、満州鏡泊湖の奥である。幹候教育と言うものの、ソ連軍の侵入で防空壕を掘る作業のために、情報のキヤッチが遅れたのである。

無条件降伏の報を聞いた時には、もうすでにソ連軍の大型戦車が、雲霞のように凄い轟音をたてながら走り行くのを見た。そして戦車上には若い男女の兵士が乗り組み、戦勝のコ

ーラスを奏でながら屯河にむかって進む。この轟音と混声のリズムがわたしどもの心に、にくく悲しくそしてうれしくも聞きとれた。

八月下旬であったか、南湖島の師団指令部にいたわたしは、幹候の座金も捨てて、雑用におわれていたときのこと、満ソ国境から後退して来た部隊の中から、偶然にも大正大学の先輩郁芳随清師に会った。どちらから声をかけたのか記憶にないが、先輩は任官されていたものの、苦戦のあとが顔色に残っていた。国境部隊に比べると、わたしは鏡泊湖の地の利を得て、戦闘の経験なしに済んでしまった。だからそれを特に感じたのかも知れない。

先輩が南湖島に來られた頃から、非戦闘員の婦女子が大勢集結しはじめた。若い女子は男子服を身にまとい、髪をおとしての変装、すでに死亡した子を背に負いながらも山道を素

足で逃げ来た婦人、空腹のあまりわたしどもの顔を見るなり食べ物を求める悲痛なことば、どの様もこの世ではない地獄絵図を思わせるありさまである。しかもやっと天幕におちつく夕暮れどきになると、ソ連戦車からの機銃乱射、その上ソ連兵士の天幕への侵入、思えば恐しいことばかりであった。先輩との会話はなつかしさとうれしさで、ことばにもならなかったが、東満の様子を聞き、わたしどもの行動を伝えること十数分、部隊の動きにつれて別れたが、その後未だお会いしたことがない。

九月に入ってソ連軍の命で部隊の集結がはじまった。そして武装の解除をされた。この時ほど、勝者と敗者の差の大きいことを感じたことがない。(誰しも同じであらうが。)

武装解除されたわたしどもはソ連軍の指揮下にはいった。そしてすべての行動に束縛をうけて何一つ自由にならない生活をはじめた時である。

四国の若山君と名乗った古年兵が、「懺悔文」を知っているかと、わたしに声をかけた。いままで自分を忘れていたわたしは、はっと呼び起されたような感じがした。若山君は、たしかお経に懺悔文というのがあった。おれは子どもの頃祖父に教えられたものだ。と、言って、切れた糸を結ぶように「我昔所造諸悪業……」の句を記憶から引き出しながら口ず

さんだ。そしてことばを続け、夜寝るときは、いつもこれを称えて寝るんだ。と、話す。結論は、自分を忘れがちな今の生活にこそ、自分を見つめ、自分を大事にして、心におちつきを持たねば駄目だ。急いだり、あわてたりすれば、自分で自分を苦しめ、親のもとに帰れないと思う。どんなことがあっても、この経文だけは忘れないようにしたい。そして自分を見つめ、故郷に帰るんだ。と、言うことであつた。

このとき、わたしは二十歳、若山君と年令の差こそあれ、仏門に育ったわたしに、彼の気持がよくわかった。わかるだけではなかった。彼から教えられる立場になった。それは、ソ連軍の警戒が厳しくなればなる程、脱走を考えていたわたしどもであつたから。

数日足らずして収容所の再編成から、若山君とも別れた。いまだここで生活されているか知らないが、懺悔文からわたしに自重するようには言われた彼に心から感謝したい。

鏡泊湖から東京城そして牡丹江と収容所を転々と移り、十月末にシベリヤ行きの列車に乗った。荒涼たる原野のシベリヤに――。

しかしわたしの心には、どんな風雪にも負けない強い心があつた。それは若山君のことばと、蓮華台上の弥陀本尊の加護を信じていたから。

(終戦記念の日)

道

日岡への道

高橋良和

京都の知恩院のうしろの山を華頂山というが、その華頂山から、山づたいに京都の方におりず、東の方、山科の方におりと、日岡というところがある。

京都から大津に走っている京津電車だと、日岡という停留所のあたりで、今日もう住宅も建てずみ、繁華なところになつてゐるが、戦前では淋しいところであつた。

こんなところに法然上人の霊跡がぼつんと一つ残つてゐる。

それというのも、四十八巻伝に記されている、「木曾冠者花洛に入洛せしときのみ聖經をひもとかず」とあることばである。木曾冠者というのは、木曾義仲のことで、義仲は越中の礪波山に平家の軍隊を破つたが、一体そのときの法然上人はどうしてゐたのであろうか、その疑問にこたえるのが日岡の場所である。

このとき平家の一族は、天皇とともに神器を奉持して西岡

に逃げている。それを追つて義仲は入洛したので、静かな京都は戦場と化してしまつたようである。

当時法然上人は黒谷であつた。木曾義仲の京都乱入を知つて、京都の街々が義仲のために荒され、そればかりか、後白河法皇のお住居の京都御所の炎上をみるに忍びずというので、この日岡の里に山づたいに難をのがれて来ている。

そのときの様子を、光照寺の伝説から想像してみると、おそらく黒谷山から京都の街に入らず山ぞいの道をここに来てゐるので、途中、仙人が案内をしている。

ところがこの仙人の案内をうけた途中で、法然上人は気分がすぐれず、何度も休息されたいらしい。

そこで仙人は、気の毒に思つて、山ぞいの松の木の葉をあつめて、それを燃やして暖をとり、更にまたお粥を煮いて、進上してゐるのである。

法然上人は、その供養で漸く身体も元氣になり、この光照

寺に入ったという。

然し光照寺の滞在はわづか一日であつたらしく、翌日はすぐまた吉水の庵室に立ちかえっている。

然しその後は何回となくこの寺にみえたらしく、村民を化益されたということである。

ところで、このように松葉を燃やして上人の身体をあたためたということから、毎年の御忌会には、青松五駄、青銭五貫文、玄米一斗五升をこの寺の檀家が用意して、飾牛にひかせて黒谷本山に献上したとつたえられている。

全く上人一日の逗留がよき教化と結びついたといえる。

この寺は別に二十五霊場となっていないが、御詠歌がある。戦のちまたとなりし都より、のがれましけん日の岡の里というのである。

この寺は華頂山の背後にあるから、頂後山という山号である。

そしてこの寺の宝物には、法然上人御手作の御影、そして、お母さんからおくられてきた便りをあつめてつくられたという地藏尊があるし、慈覚大師の毘沙門天も安置されている。

慈覚大師作の毘沙門天などがあるところからすると、昔は天台の寺であつたのかもしれない。

もともとこの日岡は三方山に囲まれたところであるが、東の方から日をうけるのが早いということから、日岡と称したらしく、日向ともいう、

もつとおもしろいのは、姥のふところなどと呼んだこともあるらしい。というのも、日のよくあたるところであり、厳冬といえどもあたたかいというので、姥のふところなら、そうであつて、子供にとってなつかしいところであるから、そのような名をつけたものらしい。

ここにくるのには、いわゆる日岡峠を越えてこなければならぬ。

日岡峠というのは、一筋の小茎であつて、その昔、木食上人が、この道を通る人々が難儀をするので、道路を拡張したとつたえられている。

法然上人が通つたという車坂のところには、今車石の記念碑が建てられている。それは京津電車の九条山停留所のあたりであつて、その昔、車の下に敷かれていた峠の石をあつめて建てたという記念碑が残っている。

日岡の光照寺に法然上人が一日逗留した、などというようなことを知っている人は少ない。

然しその由緒からしても、上人の霊跡として縁りの多い寺であるといえる。

伺 御 中 暑

大阪市天王寺区上之宮町二六の二
上宮学園

学園長

小林大巖

熊本市九品寺三丁目一番一号
鎮西高等学校長

上田貞雄

開八記念乳児施設竣工(四十六年三月)
静岡市鷹匠二丁目二四一八
華陽院
日吉町保育園

堀田良謙

家政学園
京都家政短期大学

三枝樹正道

神奈川県葉山町堀内五六八
相福寺
明照幼稚園

杉田義俊

北川一有
長寿院
東京都台東区鳥越二一十五一十八

だん王法林寺

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

東山学園長

藤原弘道

真仏教舎教団本部会長
裏辻賢洲
福岡市外福岡町松原区
松原山大善寺住職

真野龍海

東京・芝公園

華頂学園長

水野隆樹

港区三田一―十三―十一
龍原寺

前田成孝

大音寺

本原義岳

長崎市鍛冶町

天光院

伺 御 中 暑

稲岡 覚順

川口市北町二一五〇

西 福 寺

浄土宗議會副議長

戸川 靈俊

京都市左京区黒谷町西住院
大阪工業大学・東大阪短期大学

浄土宗保護司会理事長

浄土宗議會議員

栗本 俊道

近竜寺 住職

松濤 弘道

栃木市万町二二一四

電話(〇二八二)二一〇八〇二番

浄土宗議會議員

柴田 敏夫

横浜市港北区菊名町五二一

蓮 勝 寺

京都市寺町綾小路南

聖 光 寺

小林 忍戒

電話(〇七五)三五一一七五八四番

函館 称名寺

住職 武藤 善友

執事 須藤 隆仙

財団法人全日本仏教会文化局長
浄土宗議會議員

白幡 憲佑

横浜市南区庚台久保山

光 明 寺

五重相伝勸誡師

小布施 弘学

長野市松代町

長 明 寺

光 運 寺

飯田 信弘

四日市中部三

法衣・仏具

本社 京都市東山区古門前三吉町三三七

(二六〇五)

電話(〇七五)五六一一〇六九〇(法衣)

支社 東京都港区芝西久保巴町一〇六の

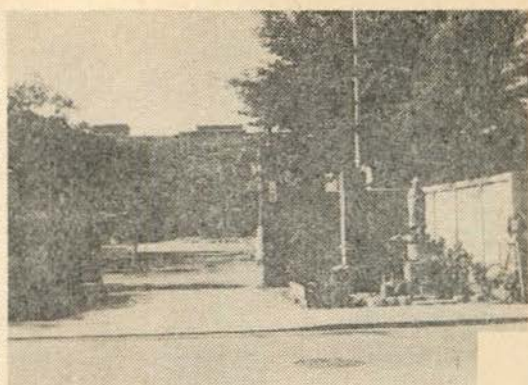
一(二一〇五)

電話(〇三三)四三一一〇四二八

株式会社 安 藤

代表取締役 安 藤 宇助

法然上人鑽仰会



寺 殿 靈 現 在

今回は深川の靈
殿寺と同寺の開山
雄誓松風靈殿上人
直筆の一枚起請文
について紹介した
い。

靈殿寺は寛永元
年（一六二四）に
多くの檀信徒の協
力を得て江戸八町
堀の海上を埋めた
ててそこに新たに
建立した寺であ
る。靈殿寺は他の

檀林寺院に比較すると、歴史は浅いが、開山靈殿の力と檀信徒の協力により、創建と同時に飛躍的な発展を遂げ、江戸時代には増上寺・伝通院・幡随院と並んで江戸四か檀林の一つとして活躍している特異な寺院である。

靈殿は生実（千葉市）大蔵寺二世安誓虎角雲潮に師事した。知恩院中興の祖、満誓尊照も兄弟々子である。彼は若くして師の跡を継ぎ、大蔵寺三世として活躍したが、慶長二年

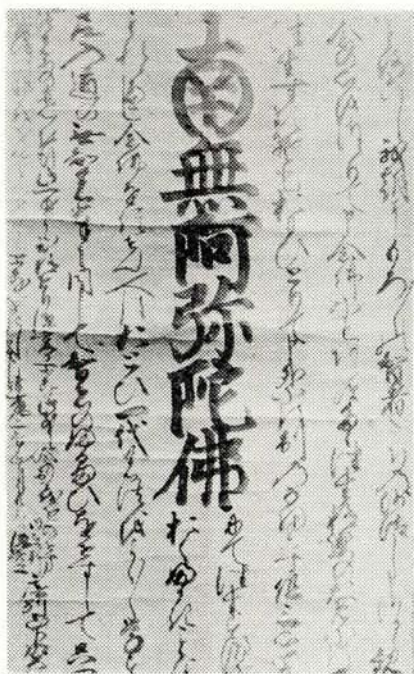
（一五九七）頃の三毒滅不滅の安心問答の際、不滅論者の代表として、増上寺の源誓存応（後の普光観智国師）等の滅論者と論戦をはり、敗れたために大蔵寺を離れた。尚、この安心問答の優劣は学問的なものでなく、多分に政治的な目的で勝敗が決定されたものであり、靈殿の教義が間違っていたのではない。彼は近世初期を代表する学僧であり、高僧であった。このことは前述したが、靈殿寺の建立の際、彼が幕府や有力者の保護をうけずに、多く檀信徒の協力により寺を建てているのをみても、いかに多くの大衆の支持をうけていたかがわかる。この世間の名声により、靈殿はついに寛永六年十月、三代將軍家光の命により、知恩院の三十二世となっている。一時失脚したかに見えた靈殿ではあるが、その学識と實力により立派に第一線に復帰している。知恩院に入った靈殿は火災により焼失した山門や本堂等を復興し、さきの満誓尊照と共に江戸時代の知恩院の基盤確立に尽力している。

ここに紹介した一枚起請文は靈殿上人直筆のものであり、現在大蔵寺に残っている。書写年代は明確でないが、大蔵院靈殿と署名しているところを見ると晩年のものである。一般の一枚起請文に比較して、中央に大きく名号が書き入れられ、一枚起請文が説誦するだけでなく礼拝の対称になっていたことがわかる。

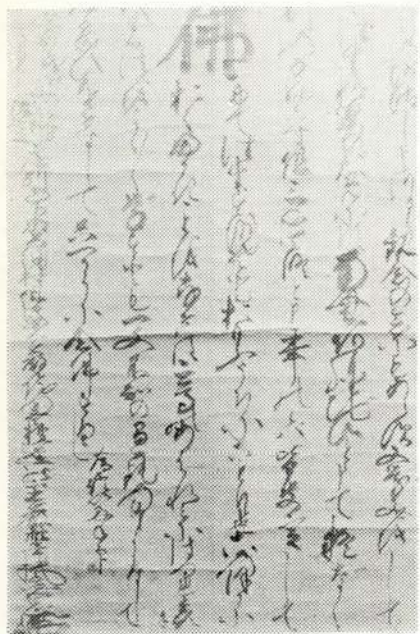
（宇高良哲）

浄土宗の

古刹をたずねて



《東京深川靈巖寺》



「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土

八月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十六年七月二十五日印刷

昭和四十六年八月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務文所内

編集室 法然上人鑽仰会

伺	御	中	暑
總本山 知恩院 門主 岸信宏 執事長 鶴飼隆玄	浄土宗宗務所 浄土宗宗務支所	大本山 増上寺 法主 大野法道 執事長 里見達雄	大本山 光明寺 法主 石井真峯 執事長 吉川哲雄 鎌倉市材木座六一七一―一九
大本山 善光寺大本願 法主 一条智光 副住職 鷹司誓玉 執事 北川恵作	東京心光院 戸松学瑛	港区南青山二丁目二六―三八 青山梅窓院 中島真孝 中島真哉	里見達雄
大仏殿 高德院 住職 佐藤密雄	東京都文京区小石川三丁目十四―六 伝通院 大河内隆弘	祐天寺住職 巖谷勝雄 東京都目黒区中目黒五―二四―五三 電話(七二二)〇八一九 一五三	東京都大田区田園調布 照善寺 田丸徳成